

2025年度 学校推薦型選抜 [データサイエンス学部] 小論文(図表理解)
出題の意図と解答の傾向

問題

【出題の意図】

インターネットサービスを提供するプラットフォームによるデータ収集の実態と、インターネット上に存在する偽情報・誤情報の問題について、総務省の資料「令和5年版 情報通信白書」および「令和5年度 国内外における偽・誤情報に関する意識調査結果紹介」を基に出題した。

近年、インターネットを基盤とするビジネスを展開するプラットフォームは世界的に成長を続けており、日本国内でもその影響は顕著である。これに伴い、サービス利用時にはパーソナルデータが収集され、それがサービスの向上に役立つ一方で、データの収集・取り扱いに関する透明性・公平性の懸念が指摘されていることも理解する必要がある。

同時に、インターネットサービスの進展に伴い、偽情報や誤情報の拡散が増加しており、正確な情報を見極める力がこれまで以上に重要になっている。このような状況下で、インターネット上の情報の信頼性を判断し、適切に対応できる能力が求められる時代となっている。

データサイエンス学部では、さまざまなデータを取り扱う場面が想定される。中にはパーソナルデータを含む場合もあり、また扱うデータが必ずしも完全に信頼できるものばかりとは限らない。そのため、データを扱う立場になる者として、データの性質や背景を深く理解し、慎重に向き合う姿勢が不可欠である。本問は、そのような意識を持つきっかけを提供したいという意図で出題をした。

<設問1>

【解答のポイント】

図表1では、モバイルインターネットトラフィックが年々増加する予測が示されており、2028年には2020年比で約6.6倍になっていることを説明する。

図表2では、日本で有名なアプリケーション(例: FacebookやGoogle)がモバイルインターネットトラフィックの中で大きな割合を占めている。さらに、図表4で出てくるプラットフォームと呼ばれる会社を見ると、モバイルインターネットトラフィックの約7割を占めていることが読み取れる。

図表3では、プラットフォームが収集しているデータが示されている。ここでは各プラットフォームがさまざまなパーソナルデータを収集していることが重要であり、企業間の違いよりも、この共通点に注目することが求められる。

図表4では、プラットフォームの売上がこの10年で急激に成長していることを指摘し、図表1・3と関連付けながら、パーソナルデータの収集がサービス向上や企業成長の要因の一つと考えられることを述べると良い。

図表5では、アプリケーションによるパーソナルデータ収集について、日本のユーザーの認識は「よく認識している」または「やや認識している」という割合が約4割であり、他国が軒並み7割以上であることと比較して極めて低い点を指摘する。その結果、無意識のうちにパーソナル

データが収集されている可能性を考察する。

日本国内ユーザーの認識を改善する方法については、以下のような一般的な方法を挙げても良いし、独自の視点や具体的なアイデアを加えるとなお良い。

「学校における早期教育」

「企業側による収集するデータの内容や目的の表示をわかりやすくする」

【解答の傾向】

図表3については、一部の受験者が企業間のデータ収集内容や量の違いに着目する傾向が見られたが、この設問では、最終的に日本国内のユーザーがパーソナルデータを収集されていることを認識できていないという現状を改善する策を問うている。すなわち、この設問の主眼は「多種多様なデータが収集されている」という共通点を読み取ることである。そのため、図表を分析する際は、テーマに関連する情報を抽出し、「何を読み取るべきか」という視点を持つことが重要である。読み取りたい内容、すなわちゴールを見据えた状態で、データを見る力も試される図表であった。ただし、「結果」ありきの議論をするということではなく、あくまで問題となっている「テーマ」に関して内容を読み取るということに注意が必要である。

その他の図表については多くの受験者が概ね適切に読み取れていた。ただし、データサイエンティストを志す者としては、「多い/少ない」「増えた/減った」といった表現にとどまらず、具体的な数値を用いて説明する力が求められる。これにより、説得力が向上する。それに加えて、文字数の制限も考慮し、論理的かつ簡潔な文章で解答をまとめる能力が問われた。

<設問2>

【解答のポイント】

図表6は、世代とメディアが多く一言で特徴を表現しにくい、回答の割合が5割を超えている年代が最も多いSNSについて言及するか、または全体的に回答者が分散していることについて言及するかのどちらかが適切である。

図表7は、世代別に情報発信の理由の傾向が異なる点に注目する。具体的には10代～30代において、最も回答者割合が大きい回答を見ると、どの年代も「他の人」のためという点が共通しており回答割合はいずれも3割を超えている。一方、40代以降では「特に意味はない」という回答が最も多くこちらも3割を超えており、年代が高くなるほど割合が増えている。

図表8では、「すべての情報の真偽を調べた・ほとんどの情報の真偽を調べた」「ある程度情報の真偽を調べた」と回答した割合が23.6%しかなく、情報の真偽を調べるという習慣が浸透していないことを述べる。

偽・誤情報に惑わされないための方法については、以下のような一般的な方法を挙げても良いし、独自の視点や具体的なアイデアを加えるとなお良い。

「複数の情報源から情報を収集する」

「情報発信元を確認する」

「公式サイトでの情報を確認する」

【解答の傾向】

多くの受験者が図表6～8を適切に読み取っていたが、設問1と同様、「多い/少ない」といっ

た漠然とした表現で終わるケースが目立った。特に文字数の制限がある中で、関連するデータをまとめ、簡潔に特徴を述べる力が求められた。

また、偽・誤情報に惑わされないための方法については、単に「情報が正しいか調べる」といった表面的な内容で終わる回答があった。文字数の制約によるものと考えられるが、前半部分の内容をもっと簡潔にする必要があった。また、現状すでに実施されているような内容を書いている受験者もいたが、今回の設問では高い評価につながりにくい。高評価を得た解答は、例えばストリーミング配信サイトでの広告を活用するアイデアなどのユニークな提案をしているものが挙げられる。